

令和7年度第1回療育に関する情報交換会 議事録

- 開催日時 1回目：6/25（水）10:00～11:30
2回目：6/27（金）10:15～11:45
- 場 所 兵庫県龍野庁舎 第1会議室
- 内 容 一般社団法人 zutto 川戸様・武長様よりご講演

～自己紹介～

講師：川戸 夏子 氏

TSUBASA の管理者&一般社団法人 zutto の代表理事。

小さい頃からの夢だった幼稚園の先生として17年間勤務。

ずっと幼稚園の先生として働きたいと思っていた矢先、息子（当時中2）が不登校に。

仕事と不登校生活の両立が難しくなり、退職。

息子が中学校を卒業する頃、義務教育終了後の所属がない現実には不安を抱えた。

通信制の高校に決めてはいたが、通えるかどうか分からない状況で、「もし通えなかったらどこがフォローしてくれるのだろう」と感じていた。

その後、通信制高校に通い始めたが、それで「不登校生活は終わり」とはならなかった。

そこで、気分転換や情報交換のため、同じ不登校の子どもをもつ親と太子町のカフェで相談し合った。

相談し合えるところが必要と強く感じ、この経験がきっかけで一般社団法人 zutto を設立。

たつの市や太子町、加西市などから業務委託を受け、mikke として不登校支援を行っている。

武長 加奈子 氏

一般社団法人 zutto が運営する mikke のスタッフ。

2年前まで宍粟市の小学校で先生をしていた。

今は、mikke スタッフとして福祉を含めた教育に関わっている。

～不登校の実態～（川戸氏）

2021年 全国24万5千人

↓

2024年 全国34万6千人（小中学校全体数の0.8%）

この数字は、完全に学校に行けなくなった子どものみの数字で、保健室登校の子どもや半日だけ登校している子どもなど、学校にしんどさを感じている子どもの数は含んでい

ない。その子どもたちも含むと2倍程度の人数になると言われている。

不登校について、以前まで国は「不登校児童生徒を学校に戻すことや登校を促すことを目的」としていたが、今はそういった言葉は使われていない。「不登校児童生徒の支援は学校に戻すことだけを目的とせず、社会的に自立することを目的とする必要がある。また、不登校の時期が休養や自分を見つめ直すなどの積極的な意味を持つと捉える。」と国の通知文中に書かれている。ここでいう「社会的自立」とは、誰かと力を合わせて一緒に頑張っていくという意味（自分1人で何でもやる、という自立ではない）。

一方で、学業の遅れや支援の選択上の不利益がある旨も書かれている。

しかし、このように書かれてはいるものの、学校以外で学ぶ場所や進路を考える場所、同学年の子たちと関われる場所などが地域の中にあまりない。

また、不登校児童生徒のうち、学校内にある個別に過ごせる教室や学校外にある教育支援センターに行けている児童生徒は2割～3割。残りの7～8割は、どうやって過ごしているのだろうか。

息子も個別の教室に行こうとしたが、学校に行くこと自体ハードルが高く、難しかった。また、学校外の教育支援センターに行くことも難しかった。そうになると、行くところがなく、育ち盛り子どもたちが家から出られなくなる生活に。

子どもたちは不登校の生活の中で、学校に行けない焦りや不安、どこにも行けない苦しさの中でさらに追い詰められ、孤独感を感じたり、精神的なダメージを受けているケースが多くあり、自分を責めて「消えてしまいたい」などの言葉を口にする子どももいる。家庭内で暴力的になったり、昼夜逆転生活になったり、心身ともに様々なしんどさが出てくる。そして、それは子どもだけでなく、親にも影響を与える。

誰も自分の子どもが不登校になるとは思っておらず、私自身も、自分の子育てを責めていた。不登校になりたくてなる親子はいない。子どもの不登校は、親の自己肯定感の低下やママ友などの交流からの孤立等に繋がる。

そのような不登校の背景から、やはりこの時期の過ごし方を誰かと一緒に考えられたり、複雑な気持ちを持ち寄れる場所があることがとても大切だと感じた。

不登校は、本人だけでなく親や兄弟など周りもエネルギーを使う。周りとは違う生活、そして突然始まる予想もしていなかった生活の中で、どんどん心が消耗していく。

私たちは、学校に登校した方が良いとかしない方が良いとかを決める立場ではない。

学校に行かない期間に、学校ではない場所でも、人と関わり、いろいろな感情の体験を積み重ねたり、学んだり、子どもらしい健やかな成長ができるように、文科省の通知にある不利益を子どもたち自身が感じないように願い、活動している。

～mikkeの紹介～（川戸氏）

mikkeのスタッフには、スクールソーシャルワーカーや看護師、相談支援専門員、保育士、学生ボランティア、不登校経験者や不登校だった子どもを持つ親などがいる。

様々な立場や視点から、子どもたちの不登校生活について一緒に考えることは大切だと感じている。

不登校はもう学校と家庭間だけで対応するものではない。子どもを取り巻く様々な機関ができることを出し合って、協働しながら子どもや家庭を多方面からフォローすることが必要。

学校に対しては、スクールソーシャルワーカーとの連携や情報交換、家庭には24時間の公式LINEを開設し、誰にも言えない不安や悩みを吐き出せるようにして、個別対応もしている。不眠や自傷行為があるなどの場合は、病院の受診を促している。

また、外に出にくい子どもたちに対しては、月1度オンライン居場所を開催し、年2回オンラインからオフラインに、家から出るきっかけにできるようなイベントも開催。

地域の相談支援員とも連携しており、放課後等デイサービス（以下、放デイ）などの福祉サービスの利用に繋がるケースあり。放デイは利用開始時に家庭や相談支援、学校との繋がりがあってスタートできる。18歳まで利用可能で、継続した関わりが持てる。教員だけでなく、様々な職の人たちが放デイにはおり、その放デイならではの体制こそ、不登校支援に活用できることがたくさんあると思う。

～グループワーク～

【6/25（水）開催分】

Aグループ

不登校気味の子どもをサポートしていると、発達障害のあるケースが多いように思う。そのため、児発から切れ目のない支援をしていかないと難しい。気付かれずに静かに座って、言いたいことを言えない、思ったことを表に出せない子が登校しにくいのではないか。周りから見ると、特に何の問題もないように見えても、実はすごく劣等感を感じていたり、自己肯定感が下げられるような経験をしたり…そう捉えてしまう子が多い。居場所や信頼できる方（学校の先生や親など自分を認めてくれる、困っていることを理解してくれる方）がいることが自己肯定感を高めることに繋がるのではないかな。完全に行けないようになってからでは手遅れなので、それまでに気付いてあげる力や見極める力が必要。

Bグループ

グループ内の事業所に、完全に学校に行けない子どもを抱えているところはいなかった。ただ、行きにくい・生き洩る子どもがどの事業所にも数人いる。前から利用していた子やADHDの子が事業所を利用するケースが多い。学校との連携が難しいケースもある。上手くいくケースとの差が何なのか（学校側の問題なのか、事業所側の問題なのか）はよく分からない。

Cグループ

課題はコミュニケーションにあるのではないかな（人との関わり方や誘い方、距離感等）。放デイでのコミュニケーション習得が必要なため、放デイで友達や先生とのコミュニケーションを通して学んでもらうことが重要。放デイに来られない場合は、保護者や学校、

相談員との関係やコミュニケーションに課題があるのではないかと考える。

Dグループ

グループ内に不登校気味の子どもを抱えている事業所が複数あった。親支援が大事。おうちでお手伝いしているから登校しなくて良い、はちょっと違うが、次のステップに進みやすい状況ではある。放デイに通うことで、生活リズムが整い、学校に行けるようになるケースもある。学校に行っていない日は放デイを使えないのではないかと意見があったので、再度制度を確認したい。急に登校できなくなる子もいるので、その子たちにどう対応していくかが課題。

Eグループ

グループ内には、不登校の子どもがいる事業所もあれば、休みがちな子どもがいる事業所もあった。児発に通っているが行きにくい子や生き洩りがある子は放デイに引き継いで、その子の居場所を作ってあげたい。時々不登校になる子は、学校と連携しながら、放デイの利用をどうしていくのかや、今後の対応について考えていきたい。自分で「引きこもってはいはだめだ」と思って、放デイに通いだした子もあり、事業所としてその子の今後や夢と一緒に考える責務を感じている。その子の状態に合わせて、周りの支援者同士で連携しながら支援していくことが大事。

Fグループ

グループ全員、不登校の子どもの受け入れ経験があった。1つの事業所ですべて対応することは難しい。物理的な場所や保護者への対応を含めて課題が大きい。他事業所との連携にも課題あり。

Gグループ

主な課題としては、子どもの寄りどころや人をどうやって見つけていくか。放デイにも行けなくなった子はどのように社会との繋がりを持ち、居場所を見つけていくのか。親としては学校に行ってほしいという期待があるが、そのような期待を子どもが感じ、より不安にさせてしまうと考える。親が子どもをどうにかしようと焦ることが子どもの焦りに繋がる。親や周りの大人が子どもに対してどの程度考えを伝えるべきか、という課題がある。

【6/27（金）開催分】

Aグループ

グループ内には、不登校の子どもや不登校気味の子どもがいる事業所もあれば、そういった子どもはいない事業所もあった。しかし、すべてに共通していることは「居場所が大切」ということ。子どもたち本人への声掛けや、支援をその子その子に合わせて行うことで、なかなか思いを伝えられない子どもたちが発信できるようになると良いなと思

う。また、話を聞いてもらうなど少しでも安心できる存在がいることで、その子にとっての居場所づくりができるのではないかと感じた。

講演の中でもあったとおり、保護者の方も不安感がある状態なので、ご家族のケアも大切だと感じた。

B グループ

卒業後含め、社会との繋がりをどう維持していくか、また、居場所をどう作っていくか、が課題。放デイについて、学校に行っていないと使えないという認識の親御さんがいるケースや、放デイと関係ができていないのにいきなり行くのはハードルが高いと感じ、予約をしても結局行けないというケースがあった。

C グループ

グループ内には、不登校の子どもはいないが、生き渋りの子どもがいる事業所が多かった。学校に行けていたが引き込みになってしまったケースや、行き出したものの親御さんの学校の先生への不信感から「行かなくても良いよ」と言うようになってしまったケースがあった。また、自殺した方の元を辿ると不登校のケースも多い。川戸さんが個別サポート加算のことも仰っていたが、「学校に行きにくいこと＝不登校」という認識に繋がりにくい傾向がある。学校との連携が大事だと感じた。

不登校について民生委員に相談しているところもある。しかし、不登校の子が放デイに行けるようになっていたが、民生委員が一緒に行ったことで逆に行き辛くなってしまったケースもあるようで、不登校になりやすい子どもは干渉されることが嫌ということもあるのだと感じた。「熱心すぎる」や「関わりすぎる」の線引きが難しい。

D グループ

4事業所のうち3事業所が不登校の子どもの支援をしている。課題としては、まずは家から出てきてもらうということ。mikkeさんのようなオンライン環境があれば良いかもしれないが、まずは参加してもらうための信頼づくりが大事になってくる。

私たちのような事業所は相談がないと動けないので、支援に繋がらない難しさがある。当事業所では就労B型もしており、最近引きこもりの方からの相談も多く、4月以降5～6件の相談があった。先日、17歳の引きこもりの子から相談があり、体験の日も決めていたが、前日に母親と喧嘩をしたことで来られなくなってしまった。

みんなこのままで良いとは思っていない。何かのきっかけで、そこから這い出たい人がほとんど。また、みんな、何らかの形で誰かの役に立ちたいと思っている。少しでも自信を付けてもらって1歩踏み出すきっかけになれば。

mikkeさんの素晴らしいところは、運営時間が決まっているのに参加者が来ているところ。私たちは午前中をフリータイムにして「来ても良いよ」としているが、なかなか来てくれない。何かできないかと動き出したところだが、やはりきっかけがないと来てくれないのではないかな。

各事業所の支援の1つ1つがその子の今後に繋がってくるのではないと思う。当事業所では、2名までの制限付きだが、在宅就労も始めた。本当に何が幸いするか分からないので、人と関わることで自分からきっかけを探すことが大事なのではないかを感じる。

～まとめ～（川戸氏）

たくさんのケースを持つ中で、同じケースは1つとしてなかった。その子の持っている性質や背景などが違うので、支援の難しさを感じた。

ただ、共通して子どもが辿ることがある（以下の表参照）。

不登校段階	状態	特徴
第一段階	不登校開始期	頭では「いかにくちや」 身体は「いきたくない…」
第二段階	悩み苦しむ期	苦悶するとき 暴れたり怒鳴ったりして感情を発散することもある
第三段階	エネルギー補充（無為）期	一日中寝る 部屋（真っ暗な状態）にこもる
第四段階	エネルギー再活性期	好きなことをやり始める 昼夜逆転生活
第五段階	再活動希望期	「ひまだなあ」「〇〇しようかな」という発言がでてくる
第六段階	リハビリ（不安定活動）期	実際に活動を始める 休みながら進んでいく
第七段階	完全登校 社会復帰期	安定して登校できる 社会と関わりを持ちながら生活できる

こちらが決めつけるのではなく、今どのような関わりが必要なのか、どうしたら心地よいかを考えることが必要。

どういう支援が必要だったかを不登校だった子どもやその親御さんに聞いたところ…

親 → 悩みを言い合いたい。思いを共有したい。本音で話したい。一緒に考えてほしい。

仲間に出会いたい。情報交換したい。

子 → 安心できる場所がほしい。話をきいてほしい。興味を持ったことを誰かと一緒にやりたい。得意なことを認められたい。一人じゃないと感じる場所が欲しい。笑顔になれる場所がほしい。

1つの事業所ですべて対応することは難しいが、それぞれができることをやっていくことが重要。地域の資源として活動していきたい。

～mikke の取組～（武長氏）

子どもを変えようとしたり、親に指南することではなく、支援者としての在り方についてお伝えする。

mikke

→ たつの市で月 1 回、太子町で月 2 回開催。

学校に行きにくい子やその親御さんが集まり、子どもたちはやりたいことを楽しみ、親は悩み事や情報を共有したり、楽しい会話をしてリフレッシュできるようなところを目指している。

mikke online

→ ゲームが好きな子や外出することに抵抗があるが、ゲームを通して人と関わりたい子向けに月 1 回開催している(youtube を利用)。実際にゲームをするだけでなく、見るだけ・チャットだけでも参加できるようにしている。専門的知識を持ったスタッフが進行しており、ゲームだけでなく、聞きたいことや知りたいことを聞いたり、パソコンの操作や動画編集についても教えてもらえる場になっている。

オンラインのため、地域を問わず参加できるメリットもあり、問い合わせが増えている。神戸新聞の取材も受けた。

ゲームと聞くと、良くない印象を持つ方もいるが、ゲームの良さを活かした取り組みをしている。

オフライン大会も年に数回開催しており、外出のきっかけや直接的な人との繋がり場になっている。

mikke study

→ たつの市で月 1 回開催。宿題や課題、学びたいこと、誰かと一緒に取り組みたい・挑戦したい子を対象としている。

分からないところを聞きながら個別に学習を進める学習タイムと、クッキングやハンドメイド、パソコン操作やダンスなど、テーマに沿って活動したり、地域の方をゲストティーチャーとしてお招きして学びを深める探求タイムがある。

mikke personal
(訪問型支援)

→ 自宅で勉強教えてほしい子や好きなことを一緒にしてほしい子、話し相手が欲しい子など、今一番安心して過ごせる自宅で、その子や保護者の方の目的や要望に応じた学習や生活をサポート。これまで、高校に行きたい子の受験対策や日々の宿題のサポート、クッキングやゲームを一緒に楽しんだり、パソコンやスマホの使い方を教えたりしてきた。

以上の 4 つの取組があるが、どの場所においても大切にしていること。それは、「その子が居たい場所・居られる場所であり続けること」。当たり前のことかもしれないが、居場所の定義としてここは揺れてはいけないところだと感じている（その反対は、いなければいけない場所・いたくない場所）。定期的にそこに立ち返り、子どもたちの様子

を見ながら、いたい場所・いられる場所になっているかを見ながら活動している。
活動していく中で大切にしていることは3つ。

① 心地よさ（綺麗さ、快適さなどの環境設定、みんなで過ごす場だけでなく1人で過ごせる個室の用意などの個別の対応、急がせたり途中で中断させたりすることのない時間配分、見るだけ・チャットだけでもOKなどの選択できる過ごし方）

先日、宍粟市から依頼を受けて宍粟市内でmikkeを開催した。開催場所は自由だったので、現地でしっかり下見を行い、快適さや綺麗さを見極めて場所を決めた。

当日、ずっと外に出られなかった子が来てくれて、帰宅後お母さんから「窓から見える景色がすごく綺麗だったと言っていた」と電話があった。「こだわって良かった」「その子の心を動かすことができて良かった」と嬉しくなった。子どもたちの見ているものや感じているものはそれぞれ素晴らしさがあるので、そこを大切にできる居場所でありたいと感じた。

また、以前、川戸さんの息子さんが「学校にいけない僕は誕生日を祝ってもらったらいけない、日常を楽しんではいけないと思っていた」と言っていたと知って胸が痛くなった。子どもにそんな思いをさせてはいけない、誰でも楽しめる環境を提供しなければと感じた。

② 安心・安全（危機管理、事前準備、見守りと共感、共に楽しむ）

物理的な安心：守られているという感覚

心理的な安心：信頼など

③ 自分らしさ（その子のペース、気持ちや感情、人との関わり、好きなこと）

mikkeでは「今日これをしなければならない」というようなノルマを設けることはせず、「その子が今日できたところまでがベスト」と思いながら活動している。

子どもの成長は木に例えられる。「安心安全」が根っこにあり、その根がしっかり育ってこそ、楽しさや嬉しさ、面白さを感じる「意欲」に繋がり、いろんなことができるようになって「達成感」や次もやってみたいという「自信」に繋がる。

そのため、いきなり「自己肯定感が低いから上げよう」や「意欲をもたせよう」などということはせず、一つ一つ丁寧に心地よさや安心できる場所を作っていくことで、自然と流れに乗って子どもは伸びていくんだなと実感している。

【mikke 利用者の声】

（安心→意欲）

- ・mikkeは私の居場所。
- ・mikkeがなかったら僕はどうなっていたんやろ。
- ・こんな場所がずっとあればいいのにな。
- ・元不登校のスタッフにあえて安心した。僕も大人になれるんだ。

(意欲→自信)

- ・mikke で将来の夢が決まりました。
- ・mikke でなら何でもできる気がする。
- ・家族以外の人に支えてもらっている実感があって嬉しい。
- ・mikke という楽しみがあるから学校に行けています。(母より：mikke に行く日をカレンダーに書いて、その日を楽しみに学校に行けています。)

mikke で子どもたちと関わるようになって思うことは、学校は大きな存在のため、学校に行けなかったり、学校で過ごす時間が少ないと、時間が止まって成長していないように感じてしまうのではないかということ。しかし、mikke の子どもたちを見ていると全くそんなことはなく、子どもはどんな状況であっても、今、この瞬間も成長していて、伸びようとしている。子どもたちも「もっと賢くなりたい」「良い大人になりたい」という気持ちを持っている。

力をつけようと、子どもが元々持っている力を信じて引っ張ったり押し上げたりするのではなく、伸びようとする力に寄り添いながら子どもに関わっていけたら良いんじゃないかと思う。

mikke にできないこともあれば、mikke だからこそできることもある。今日ご参加いただいている事業所でも、できることはそれぞれ違っていて、そこに来る子どもたちとそこでできることがある。それぞれの強みや大切にしたいことを活かした支援をしながら、事業所同士の繋がりや支援の輪が広がっていけば良いなと感じる。

～参加者からの感想～

【6/25（水）開催分】

○事業所 A：居場所のあり方を聞いて、施設として参考にしたいと思った。

○事業所 B：普段子どもたちと向き合っている中で、「せっかく事業所に来てくれているんだから…」と大人の驕りのようなことを思ってしまったいたり、「こうしてみたら？」と言うことが多すぎたりしていなかったかな？と改めて感じる時間だった。

○事業所 C：全体を通して、自分を見つめ直す時間になった。事業所を始めた経緯の1つが不登校支援で、お母さん支援8～9割として事業所運営を頑張っている。
お話を聞く中で、mikke がどういう立場で活動されているのかが分からなかったのだが、放デイの括りになるのか？

○川 戸 氏：これは、たつの市と太子町から委託を受けて、市町の事業の1つとしてやっている。そのため、どこかに活動拠点があるわけではなく、市町に行っ

て場所をもらっている。

○事業所C：赤穂市から依頼をすれば、赤穂にも来ていただけるのか？

○川戸氏：行く。また、たつの市や太子町で開催する際は、広域で子どもたちの受け入れをしているので、そのような子どもがいればお声掛けいただきたい。

○事業所C：居場所と行き場所がなかなか見つけられないことがあるので、そうやっていただけると嬉しい。勉強にもなり、自分を振り返る良い機会になった。

【6/27（金）開催分】

○事業所D：引きこもりの子に「私たちの支援が必要だったら来て」と言ってみようかなと思う。

学校に行くことと放デイに行くことは違うが、放デイに行けば学校に1日行ったことになる制度ができれば良いなと日々感じている。

○事業所E：放デイも就労型支援事業所も、これまでは療育をする場所と位置付けられていたが、今は子どもたちの居場所としての位置付けもあるんだなと感じた。

子ども本人への支援も大事だが、その子が抱えている家庭環境や学校に対する考えをいかに周りの支援者が協力し合って解決していくかが大事。

私共の事業所でも、親御さんの育ちも非常に重要で、家族に対する支援も考えていかないといけないと感じている。

制度はどんどん認められて改善していくが、実際の運用にあたっては、様々な課題が山積していて、運用できない状態。

関係機関の意見を聞きながら、一緒に解決していく機会が増えれば良いなと思った。

○事業所F：今うちにボランティアで来ている子は、支援学校に通っていたときに不登校になり、その後仕事もしていたが結局続かず、人との関係を作るため現在ボランティアをしている。

しかし、元々自己肯定感が低いうえ、卒業すると放デイの支援も消えてしまうため、そこで築いていた関係性を卒業後もどう繋げていけるのか、について事業所内で話をしている。

そこの難しさを感じていたときに今日のお話を聞けたので、持ち帰って所内で共有したい。

○事業所G：うちの事業所では不登校支援はまだしていないが、過去に1名不登校になってしまった子がいた。やはりご家庭でのしんどさにも繋がっていたが、私たちがどうアプローチすれば良いか分からず、何もできずに終わってしまった。

また、最近、学校に行くのがしんどくなってしまったが、放デイに行っても良いのか、とある親御さんから問い合わせがあり、「うちが居場所になるのならいつでも来て」と伝えた。

私たちに何が出来るかはまだ事業所内でも考えていないが、どこかで繋がりが持てる場所にできればと思っている。